


令和 7 年度

I 国 語

(9時00分～9時50分)

注 意

- 問題用紙は4枚(4ページ)あります。
- 解答用紙はこの用紙の裏面です。
- 答えはすべて、解答用紙の所定の欄に、文、文字などで答えるもののほかは、ア、イ、……などの符号で記入しなさい。
- 解答用紙の  の欄には記入してはいけません。

注意

字数指定のある問題の解答については、句読点も字数に含めること。

1 次の1、2の問いに答えなさい。

1 次の各文中の——線をつけた漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。また、——線をつけたカタカナの部分も、漢字に直して書きなさい。

- (1) 入部を勦める。
- (2) 強い光を遮る。
- (3) 雨水が地下に浸透する。
- (4) 課題を克服する。
- (5) 明るくハレやかな笑顔になる。
- (6) 外国をタビして見聞を広める。
- (7) 環境の変化にタイオウする。
- (8) 駅に近づいた電車がゲンソクする。

2 次の各文中の——線をつけた慣用語の中で、使い方が正しくないものを、ア～オの中から一つ選びなさい。

- ア 山積みの調査資料をどう整理しようかと頭を抱えた。
- イ 大事な試合を前にして心配のあまり腕が鳴った。
- ウ 写真部の作品が金賞をとったようだと小耳に挟んだ。
- エ 生徒会の行事が無事に終わって肩の荷が下りた。
- オ バスに乗り遅れるのではないかと気が気でなかった。

1 次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

- A よく光る高嶺の星や寒の入り  
村上 鬼城
- B 夏星に海も日暮れの音展く  
飯田 龍太
- C 乗鞍のかなた春星かぎりなし  
前田 普羅
- D 七ツ星樹水の空を歩くなる  
中川 宋淵
- E 星既に秋の眼をひらきけり  
尾崎 紅葉
- F 流星の使ひきれざる空の丈  
鷹羽 狩行

注1 高嶺…高い山の頂。

注2 乗鞍…山の名。

注3 七ツ星…北斗七星。

1 寒さのやわらいだ季節に、山の向こうに果てしなく広がる星空の様子を詠んだ俳句はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

2 一瞬の星の動きによって感じられた空の大きさを、体言止めを用いて表現した俳句はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

3 次の文章は、A～Fのある俳句の鑑賞文である。この鑑賞文を読んで、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

この句では、昼間はまだ暑い日が続いているものの、夜空の星にはもう次の涼しい季節の雰囲気を感じられるという情景が詠まれている。「I」という言葉で、星は早々に季節の変化を示しているということが表されている。

またこの句は、擬人法を用いた動きを表す言葉で「II」を表現しており、季節の移ろいを深く印象づけている。さらに、こうした情景を通して星の「III」を想像させる句となっている。

(1) 「I」にあてはまる最も適当な言葉を、その俳句の中から二字でそのまま書き抜きなさい。

- (2) 「II」、「III」にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。
- ア II 事象の推移 III 華麗な疾走
  - イ II 歴史の動向 III 美しい形
  - ウ II 人生のうねり III 冷たいまなざし
  - エ II 時間の流れ III 激しい回転
  - オ II 物事の始まり III かすかなきらめき

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

齊の桓公、郭国に之き、其の父老に問ひて曰く、「郭は何の故に亡びたるか。」と。父老曰く、「其の善を善とし、悪を悪としたうわけで」

(滅亡した郭の国跡に行き)

(どうい)

るを以てなり。」と。桓公曰く、「子の言の若くんば、乃ち賢君子。何ぞ亡ぶるに至らんや。」と。父老曰く、「然らず。郭君は善(どうして)

(あなたと言葉のようであるならば)

(そうではありません)

を善とすれども用ふる(用)こと能はず。悪を悪とすれども、去ること能はず。亡びし所以なり。」と。

(用いることができなかつたのです)

(理由)

(貞観政要)より)

注1 齊の桓公…中国にあった齊の国を治めていた人物。  
注2 父老…年老いた男性。

1 「其の父老に問ひて曰く」について、次の(1)、(2)の問いに答えなさい。

(1) 「曰く」は、歴史的仮名遣いで「いはく」と書く。「いはく」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書きなさい。

(2) 「其の父老に問ひて曰く」は、漢文の「問 其父老曰」を書き下し文に改めたものである。書き下し文を参考にして「問 其父老曰」に返り点を補うとき、正しいものを次のア～オの中から一つ選びなさい。

- ア 問<sub>レ</sub>其<sub>ノ</sub>父老<sub>ニ</sub>曰<sub>ク</sub>
- イ 問<sub>レ</sub>其<sub>ノ</sub>父老<sub>一</sub>曰<sub>ク</sub>
- ウ 問<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>父老<sub>一</sub>曰<sub>ク</sub>
- エ 問<sub>レ</sub>其<sub>ノ</sub>父老<sub>ニ</sub>曰<sub>ク</sub>
- オ 問<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>父老<sub>一</sub>曰<sub>ク</sub>

2 次の会話は、本文について授業で話し合ったときの内容の一部である。あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

Aさん 「桓公が、郭国が滅亡したのはなぜかを父老に聞いたとき、父老は郭国の君主について話していたよね。」

Bさん 「そうだね。郭国の君主は『善を善とし、悪を悪とした』という考えをもっていたと、父老は答えているよ。」

Cさん 「ということは、郭国の君主は『I』だね。それなのに国が滅亡してしまったのは不思議だね。」

Aさん 「確かにそうだね。でも、まだ父老の説明は続いているよ。」

Bさん 「郭国の君主は、君主として『II』ということだよ。だから滅亡してしまったんだね。」

Cさん 「なるほど。父老が言いたかったことがわかったよ。」

(1) 「I」にあてはまる最も適当な言葉を、本文(文語文)の中から二字でそのまま書き抜きなさい。

(2) 「II」にあてはまる内容を、行動という語を用いて二十五字以内で書きなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(小学四年生の小田弘毅は、父母と祖父母、姉の芽衣の六人家族である。家族のうち、母と、祖母の「なぎばあ」、祖父の「よっしー」は家でせんべい店を営んでいる。ある日、小学校の親子レクレーションの中で家族宛ての手紙として書いた作文を発表することになった。店が忙しいため父が参加する予定であったが、仕事が入り父も参加できなくなった。親子レクレーションの前日にそのことを知った弘毅は、父宛ての手紙として書いた作文を破り捨てて、翌日登校した。)

汗臭さが染みついていている体育館が、今日は化粧品やスタイリング剤の匂いがしていた。空気がまるで特別気取っているようで、弘毅はひっそりと口を尖らせた。壁に沿って長机が配置され、いろんなクイズが用意されている。親子はそれを一つずつ回ってクリアしていく。弘毅の耳に、保護者のビニールスリッパの音が障る。

親が来ていないのは弘毅と潤だけだ。先生が、二人でクイズに挑戦するように指示した。虚しくないと言えは嘘になるが、しようがない。幸い、他の親子が弘毅たちに構うことはなかった。構われたら余計にみじめな気持ちになっただろう。

謎解きクイズが終わると、子どもたちは体育館の中央に集まった。作文を順に発表していくのである。自分の番を待つ子どもたちの緊張はなみなみならぬものがあった。

一人読み終わるごとに拍手が起こる。自分の番が迫る中、弘毅の手に作文はない。杏里が弘毅の手元をチラッと見たが、すぐに前を見た。さすがに居並ぶ親たちの前で説教をしてくるつもりはないらしい。

弘毅は、読み上げられていく作文を聞きながら膝を抱える腕に力を込め、毅然として前を見据えた。越後はアルマジロに語りかける口調で、散歩の時に、背中を丸めて転がるように走るのがおもしろく、棒を投げて取ってこないところが好きだと発表した。ペットに死んで書いたのは越後だけだ。読み終わったあとの拍手は盛大だった。母親は天井を向いてため息をついていた。

中村は弟に宛てた手紙で、お菓子とメガネの件で説教した。笑いが起こる中、大柄な父親はうちわのような手で拍手をしながら苦笑いして「分かった。帰ったら言い聞かせるから。」と約束していた。

潤は「父さん、母さん、兄さんへ。ぼくの毎日をお知らせします」と題して、自分の日頃の生活を報告する手紙を読み上げた。それで弘毅は、潤に大学に通う兄がいることを知った。

朝と晩、砂時計で時間を計りながら歯を磨いて、磨き残しがないか厳しくチェックをしていることや、歯のために食事内容や食べ方などに気をつけている「ぼくの毎日」を読み上げた。おとなたちが呆気に取られ、子どもたちがあくびを始めたあたりで、歯は大事にしましょう。松田歯科医院をよろしくお願ひいたします。と啓発と宣伝で締め括った。

拍手の中、腰を下ろした潤は、誰かに呼ばれたかのようにピクリとして、肩越しに振り返った。身をねじったまま微動だにせずに保護者たちを見つめている。薄いベージュのセーターに長いスカートに身に着けた細身の女の人が、目の周りを赤くしてこまやかな拍手をしていた。

弘毅も一度か二度見たことがある、潤の母親だ。弘毅の胸に羨ましさど嬉しさがにじみ広がる。潤にささやいた。

「母ちゃん、よく来たな。」潤が弘毅に顔を向けた。その顔は紅潮している。「親子レクレーションがあるってことは伝えていたんだ。でもまさか来るとは思ってなかった。途中参加だけど、でもわざわざ新幹線で来てくれたんだ……。」

両手で原稿用紙を持って、出来栄を噛み締めるようにとっくりと見つめた。そうこうするうちに弘毅の番が来た。弘毅は立ち上がると、

「ごめんなさい。手紙を。」忘れてきました、と謝ろうとした。「おう、弘毅。おめえ忘れてったじゃねえか。」

その聞き覚えのある声に弘毅は振り返った。保護者をかき分けてよっしーが現れた。手拭いを頭と首に巻いている。フリースを羽織って、前かけをきっちり着ていた。

「よっしー！」弘毅の呼びかけに、子どもたちが続く。「よっしーだ。」

「よっしーがいる。」弘毅が呼んでいた呼び名でみんなが呼ぶ。課外授業に来たみんなはよっしーのことを覚えていた。よっしーよっしーとコールが上がる。保護者の集団から抜け出た小柄な猫背の老人は子どもたちを見回した。

「くそ坊主ども。無駄に生きがいいな。」保護者の不在は、よっしーの口の悪さにはならん影響しない。よっしーは、原稿用紙を弘毅のほうへ突き出した。

弘毅は嬉しさでいっぱいになって、つんのめるように駆け寄る。「今日はこういうわけか客が来ねんだ。」

弘毅は原稿用紙を受け取る。乱暴に破いたそれは、セロハンテープで雑に留められていた。定位置に戻って原稿用紙を開くと、折り目から小麦粉がさらさらとこぼれ落ちた。

この原稿用紙は買ったも買ったものだ。父と母が働いて買ってくれたものだ。よっしーもなぎばあもせんべいを毎日一枚一枚焼き続けて、芽衣姉ちゃんだつて手伝って、それでこれを買えたんだ。

なんだか急に心強い気持ちになってきた。弘毅は、父に宛てたそれを、家族のみんな宛てに変えた。

父への手紙を書く時は、上手に書くとかかっこよくしようとか、喜ばせようとか考えに考えて時間がかかったが、今は下手くそでもかっこ悪くても喜んでくれるでもいいから、家族一人一人を原稿用紙の上に思い浮かべて、伝えたいことをそのまま口にした。そうしたら、大きな声が出て、ハキハキと発表できた。

読み終わると、よっしーが真っ先に拍手した。みんなも拍手する。

「よし、くそ坊主ども三本締めだ！」戸惑う担任をよそに、よっしーが音頭を取った。

タタタン、タタタン、タタタン、タタタン、よーっお、タンツ。

越後は弘毅に向かって親指を立ててにっこり笑い、中村はふっくらとした手でクラスの誰よりたくさん手を打ち合わせてくれていた。隣の潤は微笑んで拍手してくれている。

よっしーは頭の上で拍手していた。この日のためにぶら下がり続けたのかというほど、それはそれは高く腕を上げていた。

担任が「あ、あのー。縁起よく締めてくださいましたが、子どもたちの発表が残りますので続けます。」と汗を拭きながら割って入った。

全員の原稿用紙は回収された。教室の壁に貼り出されるのだ。セロハンテープで留めた弘毅の原稿用紙も、ばっちり貼り出される。そしてそれは父に宛てた手紙なのだ。

クラスのみんなは、発表と実際の文章が違うことで嘘つきだと思っただろうか。だけど、書いたものも、発表したものもどっちも本当だ。そう言えばいいだけだ。

よっしーの軽トラで帰ってくると、すれ違った梅田の老夫婦がプツプツとクラクションで合図をして去っていった。店の前にお客さんがずらつと並んでおり、なぎばあが必死の形相で車を回している。

裏の駐車場に止めて二人が表に回ってくると、よっしーの姿を認めたなぎばあが、必死の形相から鬼の形相に変わった。

「あんたー！どこまで缶詰は買っていくってんだい！豆は収穫するのつから始めたのかい!？」

「おう。おかげで立派なもんが収穫できた。」弘毅がよっしーの後ろから顔を出すと、なぎばあはわずかに目を見開いて、あっさり怒りを収めた。

(高森 美由紀「小田くん家は南部せんべい店」より)

注1 潤・杏里・越後・中村・弘毅のクラスメート。

注2 毅然・意志が強く、しっかりしている様子。

注3 説教・よく言い聞かせること。

注4 梅田の老夫婦・よっしーの知人。

注5 形相・表情。

注6 窯・せんべいを焼く窯。

1 「弘毅の耳に、保護者のビニールスリッパの音が障る。」とあるが、弘毅がビニールスリッパの音を不愉快に感じるのにはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 保護者が授業の邪魔になるような大きな音を立てて歩いていることと腹が立っているから。

イ クラス全員の作文の発表を聞かなければならないことを面倒くさいと感じているから。

ウ 謎解きクイズに取り組み親子を見て自分の親が来ていない切なさが募っているから。

エ 友人と二人で謎解きクイズに取り組みなければならないことに不安を感じているから。

オ 謎解きクイズのあとに家族に宛てた作文を発表することを思い出して緊張しているから。

2 「よっしー」とあるが、このときの弘毅の心情について次のように説明するとき、にあてはまる内容を、二十五字以内で書きなさい。

ことに驚くとともに、嬉しさを感じ始めてもいる。

3 「今日はこういうわけか客が来ねんだ。」とあるが、よっしーが弘毅にこのように答えたのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 親子レクレーションにどうしても参加したかったことを誰にも知られたくなかったから。

イ 店を抜け出したわざわざ原稿用紙を届けに来てくれたのだと弘毅に思わせたくなかったから。

ウ 弘毅の姿が見たかったという本心を知られてうっとうしい祖父だと思われなくなかったから。

エ 破られた原稿用紙をきれいに直せなかったことで弘毅を悲しませたくなかったから。

オ 客が来なかったことを冗談のように話すことでまわりの保護者たちを笑わせようと思ったから。

4 「発表と実際の文章が違う」とあるが、発表と文章が違うものになったことについて次のように説明するとき、Ⅰ、Ⅱにあてはまる内容について、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

弘毅は、受け取った原稿用紙を見て Ⅰ になった。そして、家族みんなへの思いが高まったことで、Ⅱ ので、実際の文章と発表が違うものになった。

(1) Ⅰ にあてはまる最も適当な言葉を、本文中から六字でそのまま書き抜きなさい。

(2) Ⅱ にあてはまる内容を、実際の文章と発表がどのように違うかを明らかにして五十文字以内で書きなさい。

5 本文の構成・表現についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 語り手が主人公の視点で語る部分が設けられることで、主人公の心情に同調しやすくなっている。

イ 主人公の会話文のみで物語が構成されることで、作品全体に強い臨場感が生み出されている。

ウ 時間を示す表現が一定の間隔で使用されることで、場面の変化が把握しやすい構成になっている。

エ すべての登場人物の口調が場面ごとに変えられることで、心情の変化が効果的に表現されている。

オ 地の文に常体と敬体が交互に用いられることで、複雑な展開が直感的に捉えられる文章になっている。

5 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(1)～(8)は各段落に付した段落番号である。

- 1 プフネラというアリマキ(アブラムシ)と共生<sup>1</sup>している細菌がいる。アリマキは植物の害虫で師管液<sup>2</sup>を吸汁して生きている。師管液には光合成に由来する糖分が多く含まれているが、タンパク質のもととなるアミノ酸はほとんど含まれておらず、アリマキは常に糖分過多である。プフネラはそんなアリマキにアミノ酸を合成して与え、その代わりに過分にある糖をもらって生きている。プフネラとアリマキの共生は細胞内共生という少し特殊な形態で行われており、アリマキは体内に菌細胞という特別な細胞を作り、プフネラはほぼ一生をその菌細胞の中だけで過ごすことになる。彼らの共生の歴史は長く、共生生活を始めてからすでに2億年になると推定されている。2000年に日本人研究者によって、このプフネラのゲノム配列<sup>3</sup>が決定されたが、その結果は驚くべきものだった。
- 2 プフネラは私たちの腸内にある大腸菌と近縁の細菌だが、大腸菌と比べるも持っている遺伝子の数が約7分の1になっていた。これはアリマキの菌細胞内での長い共生生活の間に、アリマキ側から提供してもらえないものは、自分で作る必要もないよねと、どんどん遺伝子を捨てていった結果と考えられている。私たち人間も、たとえば結婚すると、それまで別々にもっていた洗濯機とかアイロンとか炊飯器とか、二つあっても仕方ないものがたくさん出てきて、人にあげたり捨てたりして処分することがあるが、それと同じようにプフネラは自分の遺伝子を次々と処分してしまい、気づけば2億年の間に遺伝子の数が7分の1になってしまったということらしい。
- 3 しかし、そんなプフネラは当然もうアリマキと離れては生きていけない。大腸菌なら人の体内から外に出て、たとえば川でも池の中でも生きていけるが、プフネラはアリマキの体から取り出すと、自然界では生きていけないし、人工的にどんな栄養素を与えても培養すらできない。自分ひとりでは外敵と戦うことはおろか、自分の細胞膜さえ作れないのである。大学でそんなプフネラの話を紹介すると、プフネラはもう生物じゃない、という意見が出てくる。プフネラはアリマキの体外に出てひとりで生きていけない以上もうアリマキの一部であり、一人前の独立した生物として認めることはできないということだ。プフネラの生態を考えれば、もつともな意見である。
- 4 しかし一方で、果たして「独立して」生きている生物など、本当にいるのだろうか?とも思う。たとえば人間はどうだろう? 私たちの食べ物、野菜であれ、肉であれ、他の生物に依存している。実はアリマキと同じで、人間はアミノ酸のいくつかを自分で充分な量作る事ができず、他の生物から摂取しなければ生きていけない。人間は肉や魚といった食物からそれらを得ており、プフネラのように特定の生物に依存しないと生きていけない訳でももちろんない。ただ、改めて考えてみれば、依存する生物が生きているか死んでいるか、あるいは特定なものか不特定多数かといったことに、何か本質的な違いがあるだろうか? また、人間は呼吸によって酸素を得ているが、それは陸上の植物や海の藻類などが光合成をすることで生み出されたものだ。つまり食物にせよ、それに含まれるアミノ酸にせよ、呼吸のための酸素にせよ、それらはすべて他の生物の存在に依存している。
- 5 そう私たちは、牛や豚やニワトリに、迷惑をかけながら生きている。それが私たちの本来の姿である。そしてそれは程度の差こそあれ、人間だけでなく現在の地球上に存在するすべての生物に共通する姿と言ってもよい。たとえ他の生物を捕食することのない植物であっても、光合成に必要な二酸化炭素は、他の生物の呼吸によって大気中に供給されている。また植物の多くは菌根菌という共生菌の存在がなければ、土から十分な養分を吸収することができない。決して「独立して」生きている訳ではないのだ。この世界は、すべてを完璧にこなし、他の生物の助けなど必要のない生き物たちが集まってできているのではなく、それ単独では生きていけない、不完全でいびつな生き物で溢れている。そして、それらがお互いに補い合い、つながって全体の存在を可能にしている。それが「生命」の本来の姿である。
- 6 そして人間社会もその縮図である。周囲を見渡せば、植物のように本能的には多くのことを自分でこなす独立型の人もいれば、他人の助けがなければ生きていけないような従属型というか、寄生的な人たちもいる。そんな寄生的な人たちは一般的に言えば「迷惑」な存在だろうし、自分のことくらい自分でやって欲しいと思うのが人情である。しかし、この世からすべての「迷惑」がなくなれば、より良い世界になるかと言えば、必ずしもそうではないと、今は思う。
- 7 日本では「人様に迷惑をかけないように」と教えられて育つが、インドでは「お前は人に迷惑かけて生きているのだから、人のことも許してあげなさい」と教えられるそうだ。それは社会というものが、そういった双方向の「迷惑」を介してつながっていることを教えてくれている。何かより豊かな世界観ではないだろうか。
- 8 そうなのだ。もらう側に喜びがあれば、実は与える側にも喜びはある。親子関係などは、その最たる例だろう。その関係が強制や過度に一方的なものでない限り、「迷惑」がまったくない世界より、より豊かで喜びに満ちた世界が「迷惑」により生まれてくる可能性はあるのだと思う。

(中屋敷 均「わからない世界と向き合うために」より)

注1 共生…異なる生物が共存すること。  
注2 師管液…植物の師管を流れる、栄養分を含む液体。  
注3 ゲノム配列が決定された…すべての遺伝情報が明らかになった。  
注4 培養…増やし育てること。

- 1 次の各文中の——線をつけた言葉が、[3]段落の「もう」と同じ品詞であるものを、ア～オの中から一つ選びなさい。  
ア さて、本題に入りましょう。  
イ たいしたことにならず、ほっとしました。  
ウ このお寺は、昔からずっとここにある。  
エ 今日、どの本を読もうかな。  
オ 背筋を伸ばし、そして深呼吸をする。

2 「2億年の間に遺伝子の数が7分の1になってしまった」とあるが、プフネラがそうなのはなぜだと述べられているか。三十文字以内で書きなさい。

3 「人間社会もその縮図である。」とあるが、これはどういうことか。生命の本来の姿という語を用いて五十文字以内で書きなさい。

4 次の会話は、本文について授業で話し合ったときの内容の一部である。あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

- Aさん 「私はできることなら、相手に迷惑をかけるような状況は避けたいな。」  
Bさん 「確かに。ただ、ア プフネラはアリマキに害を与えているわけではなくて、アリマキの側にも利益があるよね。」  
Cさん 「その一方で、イ プフネラが生物としては認められないと考えるのは無理もないよね。アリマキとは離れられないんだから。」  
Bさん 「よく考えて。実際にはプフネラに限らず、ウ すべての生き物が迷惑をかけあつて生きているんだよ。」  
Cさん 「そうか。エ 最初は関係性に偏りがあつたとしても、それが後々必ず意味のあるものになっていくから、迷惑をかけることは悪いこととは限らないだね。」

(1) 会話の中の——線をつけた部分が、本文から読み取れる内容と異なっているものを、ア～オの中から一つ選びなさい。

(2) Aさんは、会話のあと、本文の内容について次のようにノートにまとめた。  
[ ]にあてはまる最も適切な言葉を、[2]段落の[4]段落の中から十字でそのまま書き抜きなさい。

筆者は、私たち人間を含め、生き物は皆、[ ]しながら生きているという前提に立つて論を進めている。そして、親子関係を例として、もらう側だけに喜びがあると考えがちだが、実は与える側にも喜びはあるという分析をしている。

5 本文について説明したものと最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選びなさい。

- ア 生物の共生についてプフネラという細菌の生態を例に挙げたあと、生物全体の相互の関わりについて筆者の見解を説明し、最後につながりの中で生きる私たちという視点で考えを述べている。  
イ プフネラという細菌の特徴を生物の共生の例示に用いたあと、人間社会をより豊かで喜びに満ちたものにする方法を述べ、最後の部分で生物全体の共生の実態についてさらに考察を深めている。  
ウ 生物の共生に関して人間と他の生物の関係について筆者の意見を述べたあと、プフネラという細菌の情報を整理し、終わりに共生における自立の重要性を示す根拠として整理した情報を用いている。  
エ プフネラという細菌の話題を提示したあと、人間と他の生物の共生関係について筆者の考えを具体例を交えて示し、終わりの部分では改めてプフネラを例として人間社会の課題について述べている。

ある中学校では、毎年校内で文化祭を行っている。三年生のあるクラスが、ステージ発表で創作劇を上演することにした。次の原稿A、原稿Bは、当日の上演前アナウンスのためにクラスで準備したものであり、A・Bのどちらかを採用する予定である。A・Bの違いと、どちらを採用する方がよいかについてのあなたの意見を、あとの条件に従って書きなさい。

原稿A

次の発表は、私たち三年一組による創作劇「明日の君へ」です。主人公のヒカリは、ある日、学校の体育館倉庫で不思議な日記帳を見つけます。なんとそこには、これからヒカリのクラスに起こる様々な危機が記されていたのです。その危機からみんなを助けようと、たった一人奮闘するヒカリ。果たしてヒカリのクラスには、どんな結末が待っているのでしょうか。それではご覧ください。

原稿B

次の発表は、私たち三年一組による創作劇「明日の君へ」です。脚本は、クラス一の読書家の田中さんが考えた壮大なストーリーに、クラス全員でアイデアを加えながら練り上げました。ハラハラドキドキの展開。迫真の演技。また、細かいところまでこだわった大道具や衣装なども見所になっています。そして、劇のどこかで登場する担任の鈴木先生にも注目です。それではご覧ください。

## 条件

- 1 二段落構成とすること。
- 2 前段では、A・Bの違いを書くこと。
- 3 後段では、前段を踏まえて、どちらを採用する方がよいかについてのあなたの意見を理由を具体的に書くこと。
- 4 全体を百五十字以上、二百字以内でまとめること。
- 5 氏名は書かないで、本文から書き始めること。
- 6 原稿用紙の使い方に従って、文字や仮名遣いなどを正しく書き、漢字を適切に使うこと。